

1 本年度の取り組みから見えてきたこと

(1) 教師おこしレポートを書き、語り合うことを通して見えてきたこと

①教師おこしレポートを書くこと

今年度私たちは「子どもの姿から考えたこと」を教師おこしレポートの中心にして書いた。自分はその子をどう見ているのかに気づくことが、教師としての存在価値を問う出発点になると考えたからである。

教師おこしレポートを書く時、私たちは気になる子どもの姿を思い返した。「その子にはこんな思いがあったのではないか」と推測しながらもそう言い切れないと感じた私たちは、姿をつなげ、内にある思いに迫ろうとした。私たちには、「どうしてもその子のことが分からない」「その子にどうしても寄り添えない」などの気持ちが生じた。そんな気持ちが生じる部分には、自分がその子をどう見ている、なぜ寄り添えないのかを見つめていく鍵が隠されていた。「分からない」「寄り添えない」からとあきらめてしまうのではなく、内にある思いを推し量り、レポートに記していく。そうした中で、その子に対する別の見方が見えてくることがあった。また、「自分のしてきたことは、本当にその子の成長を後押ししたのか」と自身を問うたり、その子の成長を後押しするために何ができるのかと、今後の働きかけを考えたりすることが起きた。

レポートに書くことは、子どもに対する見方に気づき、「自分は本当にその子の成長を後押ししているのか？」と自身を問う機会になると考える。また、レポートを書くことがきっかけとなり、改めてその子のことを分かりたいという気持ちが起きると考える。

②教師おこしレポートをもとに語り合うこと

語り合うことは、他者の子どもに対する見方に会うことである。教師おこしレポートには、ひとつひとつの言葉に、教師が子どもをどう見ているのかがにじみ出ている。語り合う他者は、レポートを読み浮かび上がってくる子ども像をもとに、自分ならその子をどう見て、どう働きかけていくのかを語っていった。

他者の子どもに対する見方は、必ずしも自分と同じものではなかった。「その子には別の思いがあるのではないか」という見方や、「その子に寄り添い切れていない」と教師の心持ちに対する意見、「こう働きかけていくことで、その子の成長を後押しできるのではないか」と働きかけに対する意見が出された。意見を受けた書き手は、「その子には別の思いがあったのかもしれない」などと考え、レポートを書く時には整理できなかったその子の別の姿もつなげて、その子の思いを推し量ろうとした。また、レポートを書きその子に寄り添おうと思っていた自分が、実は今も寄り添えていないことに気づき、自分はなぜその子に寄り添えないのかについて考えていった。

他者と語り合うことは、自身のその子に対する見方を揺さぶることになる。見方を揺さぶる時、「自分は本当にその子の成長を後押ししているのか？」と改めて自身を問うことが起きる。語り合いを終えた私たちには、「その子のことをもっと分かりたい」という気持ちが生じた。もっと分かりたいと思うからこそ、その子をよく見ていこうとする。そうした中で、その子のよりよい自分になろうとする思い

を押し量り、働きかけていこうと考えるのだと考える。

(2) 形態を変えた語り合いを通して見えてきたこと

特別支援の勉強会では、子どもがもつ悩みや戸惑いについて、見ていく視点を勉強した。授業とは関係のないことをしている子は、教師の指示が分からなかったり、自分の思いを表現できなかったりして、そうせざるを得なくなっているのかもしれない。友達が傷つく行為をしてしまう子は、人の気持ちがどうしても分からなくて過度に干渉したり、自分の不安や悩みを解決できない苛立ちをぶついたりしているのかもしれない。教師が「甘えている」「逃げています」「自分勝手」と感じてしまう子どもは、ひょっとしたら「分からない」「できない」苦しみを内にかかえているのかもしれない。特別支援の知見は、どの子の成長も後押しするために、今後さらに学んでいく必要性を感じている。

教職大学院生との語り合いでは、附属静岡中学校の「エンカウンター」の授業を参観し、子どもの姿と教師の働きかけについて、さまざまな視点から語り合った。授業の中における「瞬時のとらえ」により、子どもへの働きかけ方は変わってくる。授業は目の前の子どもとの対応の中で創られていくことや、子どもの発達段階によっても働きかけ方は変わってくることを確認した。今後、中学校の授業を参観したり、本校で大学院生が授業を行ったりなど授業交流を通して、子ども理解に基づいた働きかけ方について、研鑽を深めていくことができる可能性を感じている。

形態を変えた語り合いは、「教師おこしレポートをもとにした語り合い」とは違い、自分が接している子どもに対する見方を直接揺さぶるものではない。子どもに対する見方を広げていくものである。自分や同僚が持ち得ない別の角度からの子どもに対する見方にふれることで、私たちの子どもに対する見方は揺さぶられた。「教師おこしレポートをもとにした語り合い」だけでは、「本校で受け継がれてきた子ども観をもとにした見方」に偏ってしまう可能性がある。形態を変えた語り合いは、子どもに対する見方を広げる取り組みとして、今後も大切にしていきたいと考える。

2 来年度の方向

「教師おこし」を通して、子どもの成長を後押しするための働きかけの根拠となる「子ども理解」を深化させようとしてきた。私たちは、本年度をもち、「教師おこし」を委員会として立ち上げることを終了する。今後は、附属静岡小学校の全職員で、定期的・日常的な活動として行う。活動は、「教師おこしレポートをもとにした語り合い」という手法を根幹にしながら、自身の子どもに対する見方を別の角度から揺さぶるという意味で価値が見えてきた「形態を変えた語り合い」を組み入れていく。

「教師おこし」は、子どもの成長を後押しするための一助に過ぎない。この活動をしていけば「教師おこし」を行っていると言えるものでもない。子どもの日記やノートを丹念に見ていくこと、子どもの姿を思い浮かべ次の日の授業準備をすること、子どもの姿を学級通信で発信すること、同僚と子どもについて時間を見つけて語り合うこと、他校の研究会に参加し研鑽を深めることなど、これらすべてが「教師おこし」のきっかけとなる。「教師おこし」はやらされるものではなく、子どもの成長を後押しするために自ら動き出していく創造的なものであることを確認し、「教師おこし委員会」を閉じることとしたい。